

氏名	渡邊眞治 わたなべまさ はる
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第140号
学位授与の日付	昭和55年3月24日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	「フロンティア学説」の総合的研究

(主査)
論文調査委員 教授 今津 晃 教授 越智武臣 教授 御輿員三

論文内容の要旨

本論文は、今世紀アメリカにおける代表的な歴史家の一人、フレデリック・ジャクソン・ターナー(1861—1932)の人間像を、彼の学説、この学説を生みだした社会環境や時代背景、および彼の時代認識との関連において考察し(本論第1部)、さらに問題点を史学史の領域にしぼって、アメリカおよび世界諸地域の歴史解釈に適用・敷衍されたその学説に対し、アメリカの学者のみならず世界諸国の学者がどのような批判と評価を行っているかを論じたものである(本論第2部)。

本論文は序論と、本論としての第1部四つの章および第2部二つの章、さらに末尾の史料解説から構成されている。

序論で筆者は、ターナーの名声がアメリカ史学界のみならずヨーロッパの学者の間でも高い事実言及し、つぎにターナー学説の概要や、この学説を生んだ時代背景、さらにこの学説に対する批判と支持の代表的な論考を簡単に紹介して、本論への導入としている。

本論第1部「ターナーとアメリカ市民社会」は、つぎのように構成されている。第1章「ターナーと『フロンティア学説』の形成」は、伝記的な考察と史学史的な考察とに当てられる。前者では、少年時代の教育と環境、および学部・大学院時代の修業状況が論じられ、後者では、「フロンティア学説」の形成にいたる学問上の歩み、この学説の内容、ターナー自身によるこの学説の部分的修正が論じられる。本章で筆者が力説したのは、以下の点である。

すなわち、(1)ターナーがフロンティアの名残りをとどめるウィスコンシン州の田舎町ポーティジに生まれ育ったことは、「フロンティア学説」の形成に密接な関係を持っている。(2)ウィスコンシン大学在学中に受けた教師たちの教えが、学説の形成に影響を与えている。(3)都市的雰囲気強いジョンズ・ホプキンズ大学の大学院博士課程に学んだことが、かえって西部への郷愁をかき立てた。(4)「フロンティア学説」の骨組みは、画期的な1893年論文以前の二つの論文で、すでに形造られていた。(5)先学を追い越してターナーが「フロンティア学説」の創始者とされた理由は、(i)彼の見解が当時のナショナルリズム風潮によく適合したという点、(ii)彼が歴史学・地理学・生物学・人口統計学などに精通し、創意工夫をこらしてそれら

を総合したという点にあった——以上である。

第2章「ターナーとアメリカ市民社会」では、世紀転換期アメリカの諸事象に対してターナーがどのような見解を持っていたかが考察され、彼が当時の一般アメリカ人を代表する穏健・中道の思想の持ち主であったことが論証される。

すなわち、(1)人民党運動に対しては、はじめ批判的であったが、次第に支持へと態度を変えていった。(2)トラストと過激な労働運動に対しては、「両極端の中道を歩む」(ターナーの言葉)という立場をとり、この点で革新主義運動を支持した。(3)移民・人種問題に対しては、「新移民」の流入によって労資間の均衡が破られるのを警戒し、黒人やインディアンには関心が薄く、ユダヤ人には好感を持たなかった。ただし、ターナーが外国人移民全体に批判的であったというわけではない——以上である。

その他、本章では、アメリカの海外膨張や大学の使命などに関するターナーの考えが、「フロンティア学説」との関連において論じられている。

第3章「『セクション説』とアメリカ市民社会」では、「フロンティア学説」と相互補足的な「セクション説」の内容、この説に依拠したターナーの第1次世界大戦に対する態度が論考の対象となる。

「フロンティア学説」と「セクション説」が相互補足的だというのは、以下の点にある。すなわち、ターナーによれば、フロンティアの前進につれて数個の(六つないし八つの)、国家に類似した地域社会(セクション)が形成され、両者の相互作用によってアメリカ史は展開した。それ故、アメリカ合衆国は実質的には、州の連合というよりもセクションの連合として把握されなければならなかった。ちなみに、筆者はターナーにおける「セクション説」の形成が「フロンティア学説」の形成と時期を同じくしていること、後半生にはフロンティア関係よりもセクション関係の論文が多いこと、などに言及している。

第1次世界大戦にあたって、ターナーは活発な広報活動を行った他、ウィルソンに彼独自の国際連盟案を提出して、戦後世界の構想づくりに意欲を燃やした。ヨーロッパ国家群の対立と違って、アメリカでのセクション対立は連邦の維持と発展に寄与した。このアメリカ民主主義の経験は、ヨーロッパ新秩序の建設に貢献するに違いない。ターナーの活発な言動は、こうした信念から出たものであった。筆者は、この間の事情を詳細に説明している。

第4章「1920年代のターナー」では、晩年のターナーがその時代をどのように見、どのような対策や学問研究を考えていたかを、本務校ハーヴァードでの特別講義(1921年)や、いわゆる「警世家たち」との見解の異動、農村・都市への関心といった観点から考察する。

すなわち、(1)特別講義「自由の歴史」では、「調整された自由」によってフロンティア存在時代の自由を保持すべきだとし、後のフランクリン・ローズヴェルトの「ニュー・ディール」に相通ずる見解を示した。(2)「警世家たち」とは違って、食糧問題や人口問題に暗い予想を立てなかったが、国家的・国際的規模での農業振興を提案し、歴史家として農業・農村問題の研究に強い関心を持った。(3)フロンティアおよびセクションと並んで、アメリカ史における都市の役割の重要性に着眼し、都市史と農村史を総合的に研究する必要を説いた。

以上、ターナー晩年の思考に触れた後、筆者は第1部での叙述全体を回顧して、ターナーの人間像をつぎのようにまとめる。すなわち、「フロンティア学説」での荒野の征服という男性像をたたえ、「セクショ

ン説」で各セクション間の対立・抗争という闘争面を力説しながらも、あるいは自分自身が革新主義時代に改革を唱えながらも、つまるところターナーは穏健な保守主義者であった、と。

本論第2部『『フロンティア学説』の批判と評価』は、つぎのように構成されている。

第1章『『フロンティア学説』とアメリカ史学史——批判と評価』では、アメリカ史学界におけるターナー学説をめぐる論争、およびこの史学界における世界諸地域のフロンティア研究状況が論じられる。この際、前者は人文科学と社会科学の領域に分けて、後者は古代史、中世史、近代史に分けて考察される。

ターナーの死後、1930年代中頃から活発になった彼の学説への批判と、他方でこれを支持する立場は、(1)学説全般にわたるもの、(2)特に「フロンティア学説」にかかわるもの、(3)特定の論文に限定されたもの、(4)アメリカ史学史・史学理論全般からターナーを位置づけたもの、(5)いわゆる「アメリカ研究」、すなわちアメリカ文明論の系譜からターナー学説を論じたもの、(6)1960年公開の「ターナー文書」を使用した研究、(7)社会科学の領域、なかんずく土地問題と「安全弁説」をめぐるもの、以上七つに分類されている。これらのうち、フロンティアの前進が東部社会の不安を解消したとする「安全弁説」をめぐる論争の解説は、本章の中心部分をなしているが、筆者は、この論争がアメリカ社会移動に関する理解を深めさせた点で有意義だと判断し、また、活発な論争をへて1960年代以降、アメリカ史学界ではターナー支持の傾向が強くなった点に論及している。

アメリカ史学界における世界諸地域のフロンティア研究については、古代ローマの植民地建設、ノルマン人の植民活動、十字軍の遠征、中世ドイツの東方発展、イベリア半島におけるフロンティアの南下とスペイン王国の成立、古代から近代にいたる中国人の植民活動、そして近代ではカナダ、ラテン・アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカそれぞれにおけるフロンティアの前進、ロシアの南方発展とシベリア植民活動などが、アメリカのフロンティアとの比較研究という形でなされている。筆者はこれらを概観することによって、「フロンティア学説」を世界諸地域の歴史解釈に敷衍することの是非が論議されつつあるアメリカ史学界の現状に立ち入っている。

なお本章で筆者は、「フロンティア学説」が小・中・高校・大学の教科書に受容されるにいたった経過を述べ、この学説の影響力を測定する秤りの一つとしている。

第2章「世界における『フロンティア学説』の批判と評価」は、世界諸国でのターナー研究や、ターナーを踏み台としたそれら諸国におけるアメリカ以外の国のフロンティアの研究を概観したものである。筆者はつぎのようにまとめる。

すなわち、(1)カナダとラテン・アメリカでは、批判と支持を織りまぜて、自国のフロンティアの研究が学界で定着し、(2)オーストラリアと南アフリカでは研究が緒につき、(3)イギリス、西ドイツ、フランスでは「フロンティア学説」に関する数多くの論考が出されており、(4)オランダ、ソ連、スイス、ノルウェー、オーストリアでも、数少ないながら同種の研究が見られる、と。

最後に、本論文はハンティントン図書館所蔵の「ターナー文書」を、(1)書簡類、(2)講義用・論文作成用資料ノート、講演・論文の草稿、読書メモ、(3)新聞・雑誌の切抜き、その他の印刷物、(4)地図とスライド、(5)各地の大学図書館や国公・私立図書館に保存されているターナー関係文書の複製、(6)蔵書・パンフレット類に分けて解説している。

論文審査の結果の要旨

本論文は今世紀アメリカにおける代表的な歴史家の一人、フレデリック・ジャクソン・ターナーの人間像を、彼の学説、この学説を生みだした社会環境や時代背景、および彼の時代認識と関連づけて考察し、さらに問題点を史学史の領域にしぼって、アメリカおよび世界諸地域の歴史解釈に適用・敷衍されたその学説に対し、アメリカの学者のみならず世界諸国の学者がどのような批判と評価を行っているかを論じたものである。

ターナーの「フロンティア学説」がアメリカ史学の独立宣言といわれて一世を風靡したのは、それが、アメリカ史をヨーロッパ史ないしニューイングランド史の延長として捉える従来の学界動向に挑戦して、アメリカ的観点、なかんずく西部重視の立場から自国史を書き直す必要を力説し、連邦国家体制の整備に向かう当時のナショナリズム風潮に適合したという点にある。彼はいう、「我々の時代にいたるまで、アメリカ史は大西部への植民の歴史であった。自由地の存在、その不断の後退、西方への移住地の前進はアメリカの発展を説明する」と。ターナーにとって、アメリカ民主主義はフロンティアから生まれたものであり、19世紀におけるフロンティアの消滅はアメリカ史の第1期の終りを画する重大な出来事であった。

ところで、ターナー学説を構成するいま一つの「セクション説」は、上述の「フロンティア学説」と相互補足的な関係にある。すなわち、ターナーによれば、フロンティアの前進につれて数個の地域社会（セクション）が形成され、両者の相互作用によってアメリカ史は展開した。そしてこのセクションこそ、ヨーロッパの諸国に比較しうるものであった。ヨーロッパは内対立し、全体としての統一を欠いたが、アメリカでは各セクションが対立しながら、一つの全体に統合されている。こう考えたターナーは、アメリカ民主主義の経験が第1次世界大戦後ヨーロッパの再建に役立つことを信じて疑わなかったのである。

本論文は、以上二つの学説からなるターナー学説を、「フロンティア学説」の批判と評価に重点をおいて詳細に検討する。数百篇にのぼるターナー関係の著書・論文に論及するばかりか、公開以来まだ20年にならないハンティントン図書館所蔵の膨大な「ターナー文書」を駆使して、ターナーおよびその学説の理解に迫ろうとする筆者の意欲には、なにか執念にも似たようなものが感じられる。

しかも筆者は、アメリカ史学界における「フロンティア学説」の批判と評価ばかりでなく、カナダ、ラテン・アメリカ諸国、オーストラリア、南アフリカ、ソ連およびヨーロッパ諸国でのターナー研究や、ターナーを踏み台としたそれら諸国における、アメリカ以外の国のフロンティアに関する研究にも論及して、筆者の言葉を使えば『「フロンティア学説」の総合的研究』を目指している。規模壮大なターナー研究といえよう。

しかし、規模が壮大なだけに、いくつかの弱点も目につく。

(1) 筆者は数百篇にのぼるターナー関係の著書・論文を引用しているが、それがやや文献解題的になり、必ずしも十分に整理されたターナー学説の「批判と評価」にはなっていない。そしてこのことが、頗る多岐にわたる論点とも相まって、全体としていささか統一を欠くかのような印象を与える結果となっている。

(2) ターナーの人間像については、「革新主義者の面と共に保守主義者」「穏健な保守主義者」「結局は保守主義者」と種々の表現が用いられている。彼が穏健・中道の思想の持ち主であったことを示そうとし

てであろうが、多様な表現はかえって読者に紛らわしい感じを与える。なお、ターナーの意味する「コモン・マン」に労働者は含まれていないという指摘（本論 244 ページ）は、労働者に関する分析の不足から来ると思われ、再検討を要する。

(3) 1930年代中頃から「フロンティア学説」への批判は活発となるが、筆者はその理由を、(i)史学界の長老であるターナーの死、(ii)大恐慌とニュー・ディールにあると指摘するにとどめている。この学説が一世を風靡した時代背景には触れられているだけに、論述の不均衡なのが惜しまれる。

それはともあれ、我が国においてターナー研究は数名の学者による若干の短篇論文に限られており、しかも「ターナー文書」を使用し、かつ世界諸国史学界の動向にも論及した研究にいたっては、筆者を除けば皆無である。こうした我が国アメリカ史研究の現状を見ると、30有余年にわたる筆者のターナー研究をまとめ上げた本論文の意義は大きいといわなければならない。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認められる。